

「合格の日」

飯野文彦

午前一時近い時刻、サツキの携帯が鳴った。未登録の、覚えのない番号からだった。ふだんなら警戒して出ないとこだけれど、一瞬、迷っただけで、

「ま、いいか。まちがいなら、まちがいつて教えてあげれば」

と軽い気持ちで、通話状態にした。さすがにこちらから声をかける気にはなれず、黙って耳に押し当てる。

「サツキ？」

張りのある女の声だった。が、誰だかわからない。

「うん。そうだけど……」

遠慮がちにつぶやく。

「ごめんね。こんな時間に。でもちよつと前に聞いたばかりで。合格おめでとう」
弾む声で言われ、引きずられるように、

「ありがとう」

と答えていた。

「やっぱりサツキは、すごいよ。第一志望だったんでしょ？」

「うん。まあ……」

「いいなあ。四月から天下のお嬢様大学の女子大生なんて」

「そんなことないって」

「ううん、すごいよ。現役で合格するなんて、まず無理なもの。ほんとにほんとおめでどう」

「うん、ありがとう」

「あー、うらやましいなあ」

携帯から聞こえる声を聞きながら、サツキは考える。いったい誰だろう？

サツキが、今日発表された第一志望の大学に受かったことを知っている。となると友だちの誰かだ。けれども、誰なのかわからない。

あなた、誰、と訊ねる雰囲気でもなかった。

「いいなあー。それで遅くまで、達也さんとお祝いだったんでしょ」

「え、どうしてそれを？」

坂木達也は、同じ高校の一級先輩で付き合って二年になる。現役で東大に合格してからも、いつもサツキを励ましてくれた。合格発表にもいっしょについてきてくれた。

合格者の張り出しを見る勇氣が沸かずに、校舎の隅でジツとしていたサツキに変わって、発表を見てくれたのも達也だった。

自分のことのように喜んでくれて、家族への報告もそこそこに、二人して六本木にくりだして昼間からワインで乾杯、そして……。帰宅したのは午後十一時近くだった。

いつもなら大目玉のところだが、ちゃんと電話を入れておいたし、何より長い間の苦労が実って、栄冠を勝ち得たのだ。父も母も苦笑いしただけで叱るところか、おめでとうの言葉をかけてくれた。

ありがとう、もうあたし、大人なんだから。

シャワーを浴びて自室に戻っても、心身ともに興奮冷めやらず、ベッドの上ですわってぼんやりしていた。そのとき携帯が鳴ったのである。

「ねえ、サツキ、聞いている？」

「え、ええ」

「もう、ぼんやりしちゃって。まあ、わかるけどね。大学には合格するし、達也さんと同じに一線をこえたんだから」

「ちよつと、なぜ、知ってるの？」

「知ってるわよ。サツキ、ずつと達也さんにお預けくわせてたんでしょ。合格するまで

はって。でも、現金なものよね。合格したその日に初エッチなんて」

語調がきつくなつた。サツキは両足を曲げ、両手で携帯を抱え持ちながら、
「あなた、誰？」
と訊ねた。

「何、それ？」

「でも……」

「それじゃあ、今まであたしが誰かもわからないで、話してたわけえー？」

「だって……」

「ひどーい。いくら浮かれてるからって。でも、前からそうだよ。サツキって
さすがにカチンと来た。

「どういう意味？」

「だってそうでしょ。達也さんとはでれでれしているくせに、女の子の友だちには、
いつも怖い顔ばかり」

「いい加減なこと言わないで。いつあたしが友だちに怖い顔したの」

「今、してるでしょ？」

「それは……」

「ほらね。いつもそう。それに気がついていなかったなんて、信じられない。頭はいいかもしれないけど、性格悪すぎ」

サツキは唇を噛んだ。よっほど切ってしまったおうと思った。けれども一方的に言われ、悔しくてできない。

懸命に電話の相手を想像した。達也と自分がつきあっていることを知っている友だちとなると、数は限られる。誰も当てはまらない。

合格したことは、何人かに連絡したけれども、達也といっしょだとは内緒だった。ましてはじめて結ばれたことは、とうぜんながら完全に二人だけの秘密である。それをどうして、この女は知っているのだ。

「ねえ、聞いてる？」

甲高い声がサツキの耳をつんざいた。言い返す言葉も見つからないうちに、相手は一方的に話しつづける。

「達也さん、二年もお預けされたんだよ。年頃の男の子が、そんなに長く待てるだけでも思ってたわけ？」

「そんなのあなたに関係ないでしょ」

「関係おありよ。この二年の間、誰が達也さんの性欲処理を担当してきたと思ってる

ののよお」

殴られた衝撃を胸に受けた。そんな馬鹿なことがあるわけがない。たしかに待たせたのは事実だが、達也が別の女とそんなことをしているなんて――。

「嘘つき！」

サツキは怒鳴った。それがきっかけとなって胸につかえていたものが流れ出るように、

「達也は、そんな人じゃないわ」

「達也だって。呼び捨て……。完全にカノジョ気取り」

女は鼻でせせら笑った。

「ほんとうのことだもの。あなたなんかにとやかく言われる筋合いはないでしょ」

「哀れなもんね。お勉強はできても、そっちのほうは、ぜんぜん奥手ってわけ。ふん、かまととぶるのも、いい加減にして。今日だっていちいち『明かりを消して』からはじまって『それはいや』だの『そんなことできない』ばかり。まったく何様のつもりいい」

衝動的に電源を切った。携帯をベッドに投げる。

なげ――。どうして――。

携帯が鳴った。ディスプレイに映る番号は、見覚えのない先ほどの番号だった。

「いやッ！」

掛け布団を上を押しつけた。くぐもった着メロはなかなか鳴りやまない。たまらず携帯を取り出すなり、通話にし、すぐに切った。

ふたたびかかってくる前に、達也の携帯に電話した。すでに眠ったのか。通じずに、留守電になった。

——ごめん、こんな時間に。これを聞いたら、すぐ電話して。お願い。

そう吹きこもうと思ったけれど、発音の前に電話を切った。

三秒と間を置かず、着メロが鳴った。達也か、と思ったものの、そこに表示されたのは、あの女の番号である。

じつと携帯を見つめた。留守電設定にしておけばよかったと思って遅い。いや、そんなことをしたら、一方的に吹きこまれてしまう。着信拒否の設定をしよう。そう思っ
て、いったん通話状態にして、すぐに切ろうとしたとき、

「達也の急所は、後ろの穴よ」

と女の叫ぶ声が聞こえた。

くらくらと目まいを覚えた。指先が震えて、携帯を持っているだけで精いっぱいだった。追い打ちをかけるように、携帯から金切り声が響いてくる。

「おちんちん扱きながら、舐めてあげると、子供みたいにひいひい喜ぶんだか——」

「やめて」

携帯を耳に当て、

「いかげんなことばかり、言わないで。達也はそんな人じゃない」

「あんたが知らないだけよ。かっこうつけてるけど、本当はマザコンで、どうしようもない甘えんぼなんだから。あんたみたいな面白味のない女と、なぜ付き合う気になったか知ってる？」

サツキが黙っていると、女はあざ笑い、

「おっぱいよ。おっぱい。あんた、年のわりにデカパイでしょ。達也って、巨乳マニアだから」

「嘘よ。達也はあたしの——」

言葉がつづかなかった。これ見よがしに、

「何？ その後は？」

と女が訊ねる。

達也は自分のどこを好いてくれたのだろうか。バスケットボール部のエースで、頭も良くて、かつこも良い。女の子たちのあこがれの的だった達也のほうから声をかけてきた。自慢ではないけれど、サツキももてるほうだ。小学校時代から告白、ラブレターの途

切れたことはない。しかし一切、無視した。嘘偽りでなく、男に興味がなかったのだ。しかし達也はちがった。

すべてをそなえた理想の男性に見えた。そうか、自分がそれまで男の子たちを一切無視していたのは、達也と会うためだったんだ。と信じたほどである。

達也に求められたことはある。自分もそうなつてもいいと思っていた。けれども、いったんそうなると、達也しか見えなくなりそうで恐かった。だから今日まで我慢し、そしてついに結ばれた。

大学合格しあこがれの人とともに結ばれたのだ。最高の一日だったはずなのに、最後にこんなことになるなんて――。

「ちよっと、聞いているの。あんたの魅力はその大きなおっぱいだけなのよ」

「ちがう。そんなんじゃない」

「それなら、思いだしてごらんなさいよ。今日、××ホテルのベッドで、達也がどれだけあなたのおっぱいばかり愛撫したか」

相手はホテルの名前まで知っている。そして、どんな行為を行ったかまで知っている。

「警察に通報するわ」

「警察？ 何を？」

「盗撮してたんでしょ」

「ふん、ばかばかしい。そんなことするわけないでしょ」

「それならなぜ、そんなことまで知ってるのよ。盗撮してなければ、知ってるわけないでしょ」

叫ぶうちに、サツキはピンと来た。盗撮だけでなく、サツキ自身の携帯か、それとも達也のものかはわからないけれど、携帯の番号を盗み見て、そして嫌がらせの電話をしているのだ。大学を受かったことも、盗撮といっしょに会話を盗聴していたのだ。

「××ホテルといえば一流よ。そこでこんなことが行われたなんて、重大な問題でしょ。警察に通報すれば、すぐにあなたなんか探し当てられる」

「じゃあ、すれば？ いいわよ。全部証言してあげる。あなたが大きなおっぱいを吸われて、乳首をピンと立たせたり、のけ反っていたことも、ゼーンぶ……」

「やめて！」

両手の耳を押さえた。携帯を持っていたため、女の笑い声が聞こえ、あわてて切って、放り出す。

「やめて。もうやめてやめてええ」

涙がぼろぼろと流れた。ティッシュで拭く気にもなれず、両手で耳を押さえたまま首

を横に振った。弾みで胸が揺れ、女の卑猥な言葉とともに、達也の感触がよみがえり、全身を凍りつかせる。

「サツキ？ サツキちゃん？」

扉の外から母親の声がした。ベッドの上から飛び跳ねて、扉を開け、母親に抱きつきたかった。しかしできなかつた。自分はもう子供ではない……。

「どうかしたの？」

母親が言った。

「ううん、何でもない。ちよつと……。もうだいじょうぶ」

「でも……」

「ごめんね。いろいろあつて、興奮したみたい。もう平気だから」

「わかつたわ。温かくして寝るのよ」

母親が寝室へ戻っていくのが、気配でわかつた。

「母さん……」

つぶやいたとき、またしても携帯が鳴った。見ると、またあの番号からだ。

サイフォンのコーヒーのようにこみあげる苛立ちや不安や恐怖をすべて持ちあげ、サイフォンごと叩き割るように、サツキは携帯を手にした。

このままでは馬鹿にされるだけだ。毅然とした態度に出よう。すぐに通報すると宣言して電話を切り、その後、すぐに一一〇番してやる。

「つけあがらせて、たまるもんですか」

通話状態にした。ひと息吸ってから、きつぱりと言おうとしたとき、

「ごめん、こんな時間に」

携帯から聞こえた声を耳にした途端、サツキの張りつめた神経の糸が一気にゆるんだ。

「達也……どうして……？」

「さつき、電話くれた？」

「ええ、でも……」

「ごめん。寝てたんだ。でも今、ちよつと、あつて……起きた」

声を聞きながらも、ディスプレイを確認する。あの番号からにまちがいない。

「今日は、ほんとうにおめでとう。もしよかったら、明日。もう今日だけど、またいっしょに……」

「ねえ。どうして？」

サツキは達也の言葉を中断させ、

「どうして、この番号なの？」

「この番号って？」

「今、達也が電話している携帯、誰の？」

「誰のって、ぼくのに決まってるじゃないか」

「達也のって……」

「あ、ちよつと待って」

数秒後、達也は、

「ごめん、これ。おふくろのだった。おふくろのヤツ、真似してぼくと同じ携帯つかってんだ。ぼくがちよつとシャワーを浴びてる間に、ぼくの部屋に置き忘れたらしい。まったくしようがないな」

照れたように笑う達也の言葉を聞きながら、半ば無意識のうちに、サツキは口走っていた。

「達也の部屋で、何してたの？」

「何って……」

言葉に詰まった達也の向こうから、わざとらしく女の声が聞こえてくる。

「達也さん、ママ眠れないの。もう一回、ママを慰めて——！」